

主 題：嵐に勝る主のみ力

聖書箇所：マルコの福音書 4章35-41節

スコット・アーダバニス博士

GRACE COMMUNITY CHURCH の牧会スタッフ、及び、THE MASTER'S SEMINARY の非常勤講師、シカゴで9年間主任牧師としての働きをし、2003年から PLACERITA BAPTIST CHURCH の主任牧師として活躍、海外での働きも多く、最近では2010年にニュージーランドでのカンファレンスの講師として働きをされた。今回、当浜寺聖書神学校主催の第2回 REFORMATION JAPAN (東京・立川と浜寺で開催)の講師として、初来日された。近藤牧師とは20年来の友人。

初めに：今朝、皆さんとこうしていっしょにいることを本当に感謝しています。ここにはぜひ来たいとずっと願っていました。ですから、こうして皆さんといっしょにいることは心からの喜びです。21年前、近藤先生も私ももっと若々しかったのですが、親しい友人といっしょにすることができるのは非常に素晴らしいことです。第1礼拝の時に、近藤先生は40年前の今日、浜寺聖書教会と関わるそのきっかけがあったと話されました。きっとこの日は近藤先生にとっても特別な日であるし、この教会にとっても特別な日であると思います。プレイスリタ・バプテスト教会から皆さんにご挨拶したいと思います。浜寺聖書教会に関して、私はもう長い間知っていました。ですから、皆さんの国にこうしていることは喜びです。そして、モーティマー兄、ライトマン兄にも会うことが出来たことも喜びです。彼らはプレイスリタ・バプテスト教会の一員でした。また、私たちの教会の長老の一人が、来年6月にここに来ることになっています。ビル・バリック先生がここに来られます。この先生も皆さん心から喜んでくださるのではないかと思います。私たちは素晴らしい時を過ごすことができました。非常に忙しくいろいろな働きがあったのですが、この旅行はこれを除いて終わることはできません。もし、皆さんとこうしていっしょにすることができなかつたら。私はイエス・キリストの教会を心から愛しています。ですから、こうして皆さんといっしょにすることが出来るとというのが、日本に来たことの一歩大きな思い出になると思います。

皆さんといっしょに今日、みことばを見て行きたいと思います。マルコの福音書4章です。

マルコ4：35-41

今朝、私はローマ人への手紙12章1-2節からメッセージをしようと思っていました。でも、今朝は皆さんといっしょに「キリストについて」お分かちしたいと思います。私は福音書が大好きです。私はみことばが大好きです。これが皆さんの大きな励ましになるだろうと期待しています。神がこのメッセージを皆さんのために備えてくださっていると私は期待します。なぜなら、このメッセージはイエスの偉大な力を私たちに教えるからです。マルコ4：35-41を読みましょう。

「4:35 さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、「さあ、向こう岸へ渡ろう。」と言われた。:36 そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。他の舟もイエスについて行った。:37 すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって水でいっぱいになった。:38 ところがイエスだけは、ともなうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われぬのですか。」:39 イエスは起き上がって、風をしっかりとつけ、湖に「黙れ、静まれ。」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。:40 イエスは彼らに言われた。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことですか。」:41 彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った、「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

ここに湖に対するイエス・キリストの力が表わされています。この箇所は、マルコの福音書の中で幾つかの出来事を通して、イエスの力がどれほど偉大であるかを示す記事の最初の記事として記されています。5章に入ると、イエスは悪霊にも勝る力をもっていることが記されています。そして、死にも勝る力をもっていることを、少女をよみがえらせることによって示します。また、様々な病気に対してもイエスに力があることを記します。このようなあらゆる奇蹟は、イエス・キリストのもっている力、それが神の力であること、イエス・キリストは神であることを証明するのです。

マルコの福音書に記されているこれらの多くの奇蹟は、神の御国が近づいていることを私たちに教えるのです。12人の弟子たちのことを考える時に、これらの人物は非常に素晴らしい特権を得た人物でした。けれども、マルコの福音書を通して私たちに分かることは、この12人の弟子たちはイエスがど

のような方なのかをはっきりと分かっていなかったということです。この福音書を読んで行くときに非常に興味深いと思うのは、イエスがだれであるのかを分かっているのは悪霊たちだけだということです。このマルコの福音書の初めにあって、悪霊だけがイエスが神の子であるということに気付いているのです。ある箇所においては、悪霊たちが「あなたがだれであるか知っています。あなたは神の子です。」とイエスに言います。けれども、弟子たちはこの方がだれであるのかをイエスが復活された後までは、正しく理解することがありませんでした。彼らは分からないのです。彼らはイエスといっしょに歩み、そして、イエスといっしょに働きをしていましたが、イエスがどのような方なのか、具体的にだれなのかをはっきりと分かっていなかったのです。

彼らはいろいろな所で不思議に思います。人々も不思議に思うのです。いったい、このイエス・キリストとはどんな方なのか？事実、マルコの福音書1章27節を見ると、イエスが悪霊を戒めて悪霊がその人物から出ていった後に、人々はみな驚いて互いに論じ合って、「これはいったい何事だ！」と言うのです。「人々はみな驚いて、互いに論じ合って言った。「これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ。」。こんなことは見たことがなかったのです。彼らは自分たちの見たことがよく分かっていなかったのです。皆さん、2章の記事を覚えていますか？中風の人がイエスのもとに連れて来られました。家に入ることができなかったので、屋根を壊してイエスがおられる部屋にその人物を上から降ろしました。イエスが言われたことを皆さん覚えていますか？「子よ。あなたの罪は赦されました。」（マルコ2：5）と言われました。でも、当時の宗教のリーダーたちにはよく分かりませんでした。2：7には「この人は、なぜ、あんなことを言うのか。神をけがしているのだ。神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。」と記されています。彼らはイエスがだれなのか分からなかったのです。なぜ、このように言うのでしょうか。

3章では、イエスの家族がイエスのもとにやって来たとき彼らは言います。「イエスは気が狂っている。これはイエスであるわけではない。」、ちゃんと考えることが出来なくなっていると思ったのです。宗教のリーダーたちは3：22「また、エルサレムから下って来た律法学者たちも、「彼は、ペルゼブルに取りつかれている。」と言い、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ。」とも言った。」、このように考えていました。そして、弟子たちも4：35から41節の出来事を通して、このように言ったと記されています。41節「彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った、「風や潮までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」、これが私たちが見ようとしている大きな疑問です。「いったいイエス・キリストとはどのような方なのでしょう？」、皆さんは、ひよっとするとその答えは分かっているかも知れません。けれども、これから皆さんと考えることが皆さんにとって新鮮なものであるようにと願います。私たちの主がどのような方であるのかを私たちが知ることができるように。そして、私たちの様々な試練の中にあつてそのことが分かるようにと願います。この箇所を見て行くに当たって、私たちは六つの事柄を見て行きたいと思えます。

☆自然に勝るイエスの神としての力、その特徴

自然に勝るイエスの神としての力がどういうものかを明らかにする六つの特徴です。この出来事は約二千年前に起こった出来事ですが、ここで教えられていることは私たちの心に語りかけるものです。

1. 早急に出て行く 35-36節

35節を見ましょう。「さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、「さあ、向こう岸へ渡ろう。」と言われた。」、最初の部分を見ましょう。それは「イエスが突然そこから出て行かれた」ということです。「その日のこと」とありますが、それはいつのことでしょうか？これは4章の初めに記されている出来事があつたその同じ日です。そこでは「種を蒔く人のたとえ」が語られています。そして、弟子たちにこのたとえの意味がどんな意味なのかを教えています。群衆に対して指導をし教えました。そして、個人的に弟子たちにその意味を教えたのです。マルコは私たちにここで起こっていることを伝えようとしているのです。イエスが弟子たちに教えていたのと同じ日にこの出来事は起こっているのです。でも、35節を見るとこの日はまだ終わっていません。「夕方になって」とあります。この「種を蒔く人と種のたとえ」と、その後で起こる出来事が繋がっていることをよく見なければいけません。別の言い方をすれば、イエスはまだ弟子たちに教えをしていたのです。イエスは弟子たちとの時間を終えていなかったのです。イエスはこのガリラヤ湖の向こう岸へと弟子たちを連れて行こうとしました。彼らが、今学んだ事柄をしっかりと理解したかどうかをテストしようとするのです。イエスは「偉大なる先生」です。そして、イエスは私たちをもテストしようとするのです。様々な困難の中にあつて私たちにテストを与えるのです。

イエスが何を言われたのかを見てください。「さあ、向こう岸へ渡ろう。」と言われました。私たちはなぜ、向こう岸へ行かなければならないのか良く分かりません。もしかすると、忙しい一日から解放さ

れたいと願ったのかも知れません。5章1節を見て分かることは、向こう岸のゲラサ人の地に行く必要があったのかもしれませんが。ですから、イエスは弟子たちを舟に乗せてガリラヤ湖の向こう岸へと行くのです。向こう岸までの距離はだいたい10km位です。私はこの場所、ガリラヤ湖に行ったことがあります。私はこの3月にイスラエルに行きガリラヤ湖にも行きました。キリストが生まれ、そしてまた、教えを為された非常にすばらしい場所です。35節でイエスは「さあ、行こう！」と言います。ここに書かれているその表現の仕方を見たときに、それは非常に急いで「今すぐに行きましょう」という思いが含まれていることが分かります。イエスは弟子たちに、荷物をまとめなくてもいい、準備する必要もない、「さあ、今すぐに行きましょう。」と言われたのです。

どのようなことが起こるのでしょうか？36節を見てください。「そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。他の舟もイエスについて行った。」、ここではっきり分かることは、彼らは何か準備をしていた訳ではなく、すぐに舟に乗って、そして、安全に安定した状態の中でこの夕方の湖畔を離れて行くのです。そして、急いで、今いた岸から離れて行くのです。何もない状況から37節の出来事が起こります。

2. 激しい嵐 37節

37節「すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって水でいっぱいになった。」、ガリラヤ湖は非常に興味深いところです。ガリラヤ湖の周りには非常に高い山々があります。ヘルモン山という山がそびえています。この山々の上を越えて非常に激しい風が吹き下ろして来ます。そして、このような激しい強い風と、ガリラヤ湖面から暖められた風が吹き上がって、それらがぶつかり激しい風がガリラヤ湖上に吹き荒れて激しい嵐を起こすのです。37節を見て分かるように、激しい突風が起こって舟を覆うほどの波が起こっていたのです。湖の周りで激しい嵐が起こっていたのです。この舟に乗っている人たちにとってこの嵐は「津波」のようなものでした。この箇所を説明するに当たって、マタイは非常に興味深いことばを使っています。マタイはここでこの状況をギリシャ語の「サイズマス」ということばを使って表現します。私たちはこのことばから英語の「地震」ということばを導き出しています。

つまり、弟子たちは非常に落ち着いた状況の中からこの日の夕方船出して行くのですが、彼らはこの嵐によってまるで地震を受けているかのように非常に大きく揺れ動かされたと記されているのです。舟は激しく揺れるので、乗っている人たちはあちらへこちらへと振り舞わされているのです。その中でイエスはどこにいらっしゃるのでしょうか？

3. 叫び 38節

38節「ところがイエスだけは、とものほうで、枕をして眠っておられた。」、イエスはとものほうで眠っていたのです。このことは非常に驚くべきことだと思いませんか？イエスはその日一日の働きのゆえに非常に疲れていたのです。ですから、こんな激しい嵐の中でも熟睡されていたのです。このことは非常にユニークなことだと思えます。この方は神です。この方は全世界を統べ治める方なのですが、また、全世界の創造主です。でも、この嵐の中でこの方は眠っておられるのです。イエスはこのような嵐の中で落ち着かれて父なる神にすべての信頼を置いているのです。

最初に、急いで出発して行く姿がありました。2番目に非常に激しい嵐が起こりました。3番目に見るのは、非常に大きな泣き叫びがあるということです。38節の続きを見てください。「弟子たちはイエスを起こして言った。『先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか。』」、皆さん、どうぞ、この舟に自分が乗っていると思ってください。弟子たちは自分たちはもう死ぬと思ったのです。この弟子たちがイエスに従うようになる前に、どんな職業を持っていたのか忘れないでください。弟子たちは漁師でした。彼らは漁をすることが仕事だったのです。でも、これまで経験したことがないような激しい嵐の中に自分の身を置いていたのです。これは単なる嵐ではありませんでした。嵐のゆえに舟は波をかぶって水でいっぱいになっていました。水があまりにもたくさん入って来るので、彼らは沈没するかも知れないと思ったのです。だから、彼らはどうしようもない中で泣き叫んだのです。「先生、先生！」と、もうすでに大人になった立派な体格をしている人物たちが言うのです。「先生、私たちはもう死んでしまいます！」と。

マタイの福音書には叫び声がこのように記されています。「助けてください。主よ。私たちは滅んでしまいそうです。」。ルカの福音書では「主よ、主よ。私たちは滅んでしまいます。」です。マルコはここで『先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか。』と記しています。ここに書かれていることばは非常に興味深いものです。ここで言われていることは、彼らは自分たちが死んでしまうと思っただけでなく、『先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか。』と言って、イエスご自身もここに含めているのです。不思議に思いませんか？彼らはイエスが多くの奇蹟を起こされることを見ていたのです。でも、湖の上で彼らは非常に大きな困難を抱えます。その途端に、彼らはイ

エスがどのような方なのかをすっかり忘れてしまうのです。

私たちにもこのようなことが起こります。私たちもクリスチャンとしての人生を歩む中で、イエスを神を信じているかも知れないけれども、私たちはイエスを信じますと言っているかも知れないけれども、でも、状況が悪い方へと転がって行くと、私たちはその状況に圧倒されて信仰のない状態で立っている姿を見るのです。弟子たちは「私たちは死んでしまう」と思ったのです。私たちのような者がこの舟に乗ってこのような嵐を経験したことがない者とするなら、そのようなパニックを起こしていても不思議でないかも知れません。でも、この弟子たちはこれまでも多くの嵐を経験して来たのです。でも、このような嵐は今まで見たことがなかったのです。どんなことが起こったのでしょうか？

4. すばらしい奇蹟 39節

4番目を見てください。そこですばらしい奇蹟が起こります。39節「イエスは起き上がって、風をしっかりとつけ、湖に「黙れ、静まれ。」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。」、これは驚くべきことだと思いませんか？いっしょに考えてみてください。イエスはその人間性のゆえに熟睡していたのです。その方が、具体的に、自分が神であるというその神性を力をもって現わしているのです。皆さん、ここにいたいと思いませんか？私は幾つかの奇蹟をぜひこの目で見たいと思うのですが、これはその中の一つです。先生が起き上がって、39節「風をしっかりとつけ」とこれは非常に強いことばです。1章で、悪霊がイエスの前にやって来たときに、そのとりついている人物の口を使って別の声で語りかけました。

1:25「イエスは彼をしかって、『黙れ。この人から出て行け。』と言われた。」、イエスは悪霊を叱りつけたのです。別の言い方をするなら、悪霊を黙らせたのです。悪霊はしゃべろうとしていたからイエスはしっかりとつけたのです。それは、まるでくつわを付けられたかのようなのです。それがここで言われていることばです。イエスは舟の上に立たれて風をしっかりとつけたのです。弟子たちは水でびしょびしょになっていました。どのようにしっかりとつけたのか分かりませんが、風をしっかりとつけたのです。

39節、私はこのことばが非常に好きです。そこでイエスは湖に向かってこう言うのです。「黙れ、静まれ。」と、この状況は驚くばかりです。どうなったのか、続きを見てください。非常に簡潔に、でも驚くべきことが記されています。「すると風はやみ、大なぎになった。」、皆さんどうぞ、そこに自分がいると思ってください。風が湖を大荒れにしているのです。舟はいろんな所に揺り動かされているのです。波が舟の中にどんどん押し寄せて来るのです。弟子たちは自分の身が危ないと恐れおののいているのです。突然、イエスが立ち上がって、風をしっかりとつけて「黙りなさい！」と言うのです。そうすると完全に静まったと言うのです。ここに記されていることばを見たときに、風が段々と小さくなっていった、弱くなっていったのではありません。非常に激しい嵐、津波の中にいたのです。それが突然静かになるのです。皆さんよく見てください。イエスはこの大きな嵐をたった一つの命令で静めたのです。

そこには12人の弟子たちがいたのです。そのときに突然、嵐が静まるのです、弟子たちの体中から水がしたり落ちています。弟子たちはお互いの顔を見合わせるのです。そして、この湖の上には非常な恐ろしさが満ち溢れたのです。

皆さん、この奇蹟をよくご存じです。奇蹟とは超自然が自然の領域の中に入って来ることです。神の力が自然の中に入って来ることです。今日、この奇蹟ということばは余りにも頻繁に使われ過ぎています。野球の選手がホームランを打つと「これは奇蹟です！」と言いますが、これは奇蹟ではありません。単なる、松井秀喜がホームランを打っただけのことです。イチローが200本安打をしたというので「これは奇蹟だ！」と…、奇蹟ではありません。奇蹟とは、超自然が自然の中に入って来ることです。イエスが舟の中で起き上がって風をしっかりとつけると、そこには完全な静けさが満ちたのです。一つの命令でそれが起こったのです。

でも、ここで起こっている最も重要なことはそれではありません。それにどのように応答するかが最も重要なのです。これは5番目の事柄に繋がります。

5. 信仰のない心 40節

イエスは40節で二つの質問をしています。見てください。「イエスは彼らに言われた。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことですか。」

(1) どうしてそんなにこわがるのですか？

最初の質問は、「どうしてそんなにこわがるのですか？どうしてそんなに恐れているのですか？」ということばです。

(2) あなたがたに信仰がないのはどうしたことですか？

イエスは弟子たちに対して、これまであらゆることを見て来たにもかかわらず、「あなたがたに信仰がないのは、どうしたことですか。」と言っているのです。マタイの福音書やルカの福音書では「何と信仰

弱い者よ。」とあります。弟子たちが経験した最も危険な出来事は、舟の外にあった嵐ではないのです。彼らがもっていた最大の危険は、彼らの心の内にあった不信仰なのです。イエス・キリストがどのような方なのかを分かろうとしない不信仰が一番危険なのです。40節ではっきり言われていることは「彼らには信仰がない。」ということです。彼らは恐れていたのです。彼らは恐れを抱いていたのです。マルコの福音書の中でこの「恐れ」ということばを見ると、このことばは常に「信仰」ということばの反対の意味をもつことばです。

ですから、彼らは信仰のない心を持っていたのです。キリストを告白し、聖書を教えられている私たちも時に信仰のない心を持ちます。でも、私たち自身が様々な困難の中に身を置くとともに、様々な問題に私たちが圧倒されてしまうときに、様々な試練という状況によって私たちが圧倒されるときに、未来に心配をするときに、私の家族にどんなことが起こるか分からないときに、自分の仕事がどうなるのか分からないときに、私たちの子どもたちにどんなことが起こるか分からなくて不安になるときに、私たちも弟子たちと同じように恐れを抱くのです。確かに、私たちはイエスが神だと分かっているのですが、私が皆さんに聞くことは「あなたは未来に関して恐れを抱いていますか？」「皆さんは未来を恐れますか？」ということです。私たちも弟子たちと同じように、信仰が成長しなければいけないのです。

6. 超自然的な力 = 恐ろしい結果 41節

この最後の特徴が一番重要です。ここには恐ろしい結果がありました。41節「彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った、『風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。』」、皆さん、この41節の最初のことばを見てください。弟子たちは「大きな恐怖に包まれて」とあります。これは非常に興味深いと思いませんか？彼らは恐れていたのです。彼らは単に恐れていたのではなく、聖書は「彼らはものすごく恐れていた」と言います。このことを字義的に訳すようになります。「彼らは大きな恐れをもって恐れた。」と。つまり、彼らはもうどうしようもないぐらいの恐怖に包まれていたのです。このことは非常に興味深い反応だと思います。

もし、私とその舟の中にいたとしたら、イエスが嵐を静めたのですから、私はきっと弟子たちといっしょにハイタッチしたと思います。彼らは嵐を恐れていたのです。でも、嵐よりもものすごいものがそこにあったのです。何でしょう？皆さん聞いてください！彼らは神の御前に立っていたのです。そして、その神の臨在は大きな恐れをもたらしたのです。皆さんは実際にギリシャ語が分かっていたら難しいと思いますが、このことを説明させてください。41節に「彼らは大きな恐怖に包まれて」いたと訳されていることばと、イエスが40節で言われた「どうしてそんなにこわがるのです。」ということばとは違うことばが使われているのです。40節にある「恐れ」は嵐のゆえに起こった様々な不安のことです。けれども、41節にある「恐れ」は違う種類のものです。これは違うギリシャ語が使われています。この「恐れ」ということばは「ホボス」というギリシャ語です。これは「畏怖の念、畏敬の念を抱かせるその恐れ」です。40節にある「恐れ」は信仰の欠如を表わしていましたが、41節の2番目のこの「恐れ」は、神の前にある「恐れおののき」を表わすのです。彼らは神の御前に立っていたのです。彼らは神だけしか持つことがない御力の目の前にいたのです。ルカの福音書では「弟子たちは驚き恐れて」と記されています。この恐れは「神の前に人々が立った時に起こるその恐れ」なのです。

皆さんも確かにみことばをよく教えられていると思います。だから、皆さんもきっとイザヤが天の神殿にいたときの姿を覚えているだろうと思います。そして、そこで神の臨在を目の当たりにしたことを覚えているでしょう。イザヤはそこで「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者と、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」（イザヤ6：5）、私はのろわれるべきだと言いました。また、ペテロも大漁だったときにキリストの力を見て「…イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」と言った。」（ルカ5：8）、そのことも覚えておられるでしょう？弟子たちは神の御前に立っていたことがよく分かっていたゆえに、彼らは恐れおののいたのです。このことは非常に興味深いと私は思います。最も大きな恐れは嵐によってもたらされたのではないからです。最も恐ろしい恐れは「大なぎ」の中で起こったのです。これはこの「恐れ」がどのように起こるのかを私たちに教えてくれます。

皆さん、恐れたことがありますか？こわがったことがありますか？私もあります。「恐れ」はこういうことをするのです。「恐れ」は常に悪い事柄をますます悪く見させます。そして、神の臨在をものすごく小さくしてしまうのです。彼らの不信仰が恐れを抱かせました。そして、その恐れがイエス・キリストがだれであるのかを見失わせてしまったのです。それゆえに、信徒たちは言います。皆さんもきっと長い間信徒としての生活をされて来られたでしょう。けれども、最も大きな問題はこれです。様々な嵐の中で、様々な波に荒れ狂う波にもまれた人生の中で、皆さんはイエス・キリストを信頼しているかどうかです。皆さんはイエス・キリストがだれであるかを分かっているかどうかです。

弟子たちはイエスがだれであるのかよく分かっていませんでした。41節をもう一度見てください。『風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。』、疑問符、クエスションマークでこの章が終わります。マルコの福音書の著者は、この質問に対する答えを与えていないのです。なぜ、そんなことをしたのでしょうか？なぜなら、彼は皆さんにこの答えをして欲しいのです。「いったい、この方はだれか？」と。福音書から出て来るその答えは「このキリストはまさに神である」です。マルコにとってこのことこそがこの話の中で最も重要なポイントなのです。イエス・キリストの権威を現わそうとしているのです。イエスは悪霊の世界に対する力を持っています。イエスには病にも勝る力があります。イエスは死自体に対しても、それに勝る力を持っています。そして、自然のその海の深みにも勝る力を持っています。たった一つの命令で風も波も従うのです。これがこの原則のあり方です。

◎イエス・キリストは神そのもの

- (1) 神だけが自然界を支配することが出来ます。
- (2) イエスはこの天気を支配されました。
- (3) それゆえに、イエスは神です。

これこそがイエスがだれであるかです。私たちはこの世で、例えばコーチが勝利をもたらすことが出来ると言います。私たちは医師が患者の手術をすると言います。でも、神だけが天候を支配しています。イエスがこの気候を支配したその権威と同じもので、イエスは私たちの罪を赦すのです。罪を赦すことができる唯一の方は神だけです。

このことは聖書全体を通して現われていると思います。どのようにでしょう？神が為さることはイエスがなさるのです。イエスは神の御子です。イエスは人となられた神なのです。私たちが今読んだ箇所をもう一度思い起こしてください。それを思い起こしながら詩篇を見てください。詩篇には様々な記事がありますが、その中には神が海を支配されている様子も記されています。106：9「主が葦の海を叱ると、海は干上がった。主は、彼らを行かせた。深みの底を。さながら荒野に行くように。」、神は海を叱られたのです。イエスも風と海を叱られました。もし、皆さんが神を信じているなら、神が与えられたこの神の御子を信じるべきです。イエスご自身が言いました。「もしあなたが神を信じるのなら、わたしのことも信じなさい。」と。旧約聖書では神が海をしかりつけ、新約聖書ではイエスが湖を叱りつけたのです。詩篇104：6-7を見てください。「あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていた。：7 水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の聲で急ぎ去りました。」、イエスに叱られることによって水は静かになったのです。

詩篇89：8-9を見てください。「万軍の神、主。だれが、あなたのように力がありましょう。主よ。あなたの真実はあなたを取り囲んでいます。：9 あなたは海の高まりを治めておられます。その波がさかまくとき、あなたはそれを静められます。」、何と恐ろしくまたすばらしい箇所でしょう。「あなたは海の高まりを治めておられます。その波がさかまくとき、あなたはそれを静められます。」、これこそ、まさにイエスがされたことではありませんか？ヨブ記38章を見てください。神がついにヨブに直接的に話しかけると、38：8-11「海がふき出て、胎内から流れ出たとき、だれが戸でこれを閉じ込めたか。：9 そのとき、わたしは雲をその着物とし、黒雲をそのむつきとした。：10 わたしは、これをくぎって境を定め、かんぬきと戸を設けて、：11 言った。「ここまでは来てよい。しかし、これ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここでとどまれ。」と。」、何とすごいことが書かれているのでしょうか。「ここまでは来てよい。しかし、これ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここでとどまれ。」と、これこそがイエスがなされたことです。神が旧約聖書でされたことを、神の御子は新約聖書で行なっているのです。

皆さんにはっきりとこのことをお伝えしたいと思います。マルコがこの奇蹟を記すのは、皆さんに弟子たちが気付かなかったことに気付いてもらうためです。弟子たちははっきりとこのことを分かりませんでした。弟子たちは「いったいこれは何なのか？」と言ったのです。彼らは理解できなかったのです。弟子たちがイエスがだれなのかということに気付いたのはいつでしたか？イエスが復活された後です。イエスが復活するまでそのことは分からなかったのです。だから、マルコは弟子たちが気付かなかったことを私たちが理解できるように書いているのです。マルコが言わんとしているのは「イエス・キリストこそがまさに神ご自身である」ということです。

皆さんはそのことを知っているはずですが、時に私たちは弟子たちのように生きるのです。私たちはイエスが私たちの様々な試練の真中におられることを忘れてしまうのです。私たちはいろいろな状況の中でイエスがどのような方であるのかを忘れるのです。皆さん、きっと私に同意して下さると思います。天候が良いときの方がはるかに神に信頼しやすいと思いませんか？人生が楽なとき、良いときに神に信頼することは簡単ではないですか？でも、大きな嵐の中で神を信頼することは全く別物です。どれ位の人たちが弟子たちと同じように、嵐の中で私は孤独だと感じていますか？神の家にやって来て

自分一人しかいないのを見て、神は私のことを忘れてしまったのだと思う人がどのくらいいますか？もしかして、皆さんは今朝、神はまだ眠っているのではないかと思っておられますか？詩篇の著者はこのように言います。「主よ。なぜ、あなたは遠く離れてお立ちなのですか？」（10：1）と。イザヤはこのように言います。「ヤコブよ。なぜ言うのか。イスラエルよ。なぜ言い張るのか。『私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見ごしにされている。』と。」（イザヤ40：27）。

私たちは自分はクリスチャンだと言います。私たちはイエスの弟子だと言います。皆さんは何年もかけて聖書を読んでおられます。でも、もしかすると、私たちはこの弟子たちと同じかもしれません。私は皆さんを励ましたいのです。なぜなら、イエス・キリストは神なのです。この方は私たちと一しょにいてくださるのです。私たちの試練の中でこの方はともにいてくださるのです。この方は私たちが仕事を失った時ともにいてくださるのです。私たちの子どもが失われたときもそこにいてくださるのです。先月、私は病院に行かなければなりませんでした。今にも子どもを産みそうな女性がいたのです。彼女はお腹の中で子どもがお腹を蹴ったことを感じたと言います。その動きを感じて子どもが生まれそうだと、彼女は夫を呼んで病院に行かなければならないと言いました。病院まで車で行きましたが、病院に着くまでにもう子どもはいませんでした。家から病院までの間で何かが起こったのです。赤ちゃんはそのわずかな時間の中で死んでしまったのです。彼女はその子どもを産まなければなりませんでした。そして、私はその病院に行って死んだ状態で生まれたその子どもを見ました。彼女は完璧な姿だったのです。完全な手、完全な足を持っていました。完全な頭をしていました。でも、この子のたましいはそこになかったのです。そのような試練の中であって、彼女の家族はイエス・キリストに信頼をおかなければいけなかったのです。そのような非常に大きな必要の中であって、その必要を備えてくださる方だからです。このカップルのために私たちの教会は祈りました。私たちの教会はこのカップルを心から愛しています。私たちは彼らの顔を見ました。私は彼らの顔がイエス・キリストをしっかりと見上げている姿を見ました。彼らはこのような大きな困難の中であって、イエス・キリストがそこにあるのを知っていたのです。

これが詩篇の著者がいつも言っていることです。詩篇の記事の中にはたくさんの水についての記事があることは見て分かります。そして、この水というのは私たちが生きているこの人生の困難さを象徴するものとして使われています。詩篇69：1-2を見てください。「神よ。私を救ってください。水が、私ののどにまで、はいつて来ましたから。：2 私は深い泥沼に沈み、足がかりもありません。私は大水の底に陥り奔流が私を押し流しています。」、ここで、私たちはこの人生が大水の中にあることを知ります。詩篇の著者は人生において洪水が自分の頭の上を大きく覆っていると言っています。同じ69：14-15を見てください。「私を泥沼から救い出し、私が沈まないようにしてください。私を憎む者ども、また大水の底から、私が救い出されるようにしてください。：15 大水の流れが私を押し流さず、深い淵は私をのみこまず、穴がその口を私の上で閉じないようにしてください。」、彼は祈ったのです。水の深みが私を飲み込まないようにと…。詩篇46篇は有名な箇所です。1-3を読みましょう。「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。：2 それゆえ、われらは恐れぬ。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。：3 たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだつても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。セラ」、ここでも水が立ち騒ぎ、あわだつ姿が記されています。でも、このような状況にある結論を10-11節に見てください。「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」：11 万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである。セラ」、何とすばらしいみことばでしょう。「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。」と、

これが今日、私たちがしなければいけないことかも知れません。皆さん、皆さんが困難を抱えるときに、イエス・キリストはまさにそこにあって助けを備える方なのです。イエスがマタイの福音書28章20節で言われたことを覚えておられますか？イエスは今日、私たちにこのことばを投げかけてくださるのです。「…見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」、皆さん、ひょっとすると、神は皆さんにテストをお与えになっているのかも知れません。皆さんの信仰とはどれ位のものなのでしょう？皆さんの中には「私は信仰者としてもう20年も生きている。」と言われるかも知れません。でも、あなたの信仰はどれ位のものですか？この事柄を皆さんの未来に関して質問させていただきます。

皆さん、あなたは未来を恐れていますか？神はともにいてくださるのです。単に、自然において力を発揮される方であるだけでなく、このイエスは皆さんと一しょに舟に乗ってくださっているのです。ヘブル人への手紙の著者が言うことばを私は心から愛しています。13章にとっても偉大なすばらしいみことばが記されています。それを見て祈ってこのメッセージを終わります。そこには神の特徴について記されているのです。13：5「…『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。』」と、そ

して、6節に「そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましょう。」と続いています。

皆さん、神は皆さんに試練をお与えになります。ちょうど、弟子たちに向かって「さあ、向こう岸に向かって行こう！」と言われたと同じように。皆さんも今、もしかするとこの嵐の中であって向こう岸に向かって旅をしている最中なのかも知れません。私の皆さんに対する励ましのことばは、イエス・キリストがどのような方なのかを忘れて欲しくないということです。そして、この方が私たちとともにいるということです。皆さんの希望と、皆さんの確信をこの方に置くことができます。アーメン！